

図書館員の四季

新しいパワーをもとに… また一步

羽生病院
山口智美

利根川沿いに位置する埼玉県羽生市では、「藤」が街の花として愛されており、庭先に咲く美しい姿を通勤途中によく目にします。

色あざやかに咲きほころぶ花々は、心をなごませ、体中に新しい力を与えてくれるようです。

職場にも新しい力が加わりました。社会人としての第一歩を踏み出した新人職員達。彼らを見ると、4年前の自分を思い出します。図書の仕事を任されたものの、兼任している総務課の業務に慣れることで精一杯。雑誌等の受け入れと整理ぐらいだった図書業務ですが、終業時刻間近にかけ足で何とかこなす毎日。やりたい事とやれる事との差が縮まらず、力の足りなさを痛感しました。

その後設けていただいた現在の図書室は、スペースの都合から製本雑誌の書架がメイン。「これは書庫だね」との言葉に、未だに反論ができません。新着雑誌と単行書の大部分は各部署へ分散させている状態であるという悩みが常にありますが、それならばまず「管理」の面をよりしっかりさせようと心がけ、少しずつ、時には失敗しながら新しい業務に取り組んでいます。

病院が開院して12年。蔵書も豊富とは言えず、「図書室」としての機能を十分に備え、生かしていくのもまだこれからです。会員の皆様にはご迷惑をおかけするばかりで心苦しいのですが、誌面等を通していただく情報は、私には大きな力となっています。

「何事もやってみなければわからない。一チャンスをのがすな」をモットーに、これからも一步一步、頑張っていきたいと思います。

“シッショサーン”と呼ばれて

日本赤十字愛知女子短期大学
塩瀬亜紀

「シッショサーン（司書さん）」と呼ばれるようになって一年が過ぎた。前任の林さんから要領良くまとまった引継のレクチャーと、「大丈夫ですよ！」の励ましの言葉ももらったのスタートではあったが、何をやるにも不安ばかり。新入生への利用オリエンテーションや二年生への文献検索指導では、声を張り上げつつも（あー、自分自身が分かっていない。突っ込まれたらどうしよう……）と冷や冷や。そんな私だったが何人かの学生たちは「司書さん」と呼んで慕ってくれた。私も学生とのやりとりから勉強させてもらい、少しずつ周りの様子が見えるようになってきた気がする。

学校図書館であるから、授業の進行や出された課題、試験や実習などのスケジュールによって利用のされ方が決まってくる。学生たちがドーッと文献を探しに来た時はてんてこまい。でも見つけた本や雑誌を「これいい。ピッタシ」などと、すぐ借りていったり、複写しに走ったりするのを見るとこちらもうれしくなってしまう。

腹の立つことも多い。飲食禁止の館内に缶ジュースを持ち込んでいるのを注意すると「カラなんです」と開き直る。私語が高じて「おしゃべりサロン」となってしまう「図書館ですよ！」と怒鳴ったり。本、雑誌の紛失が結構あるのも悲しいことだ。

そんな泣き笑いの日々だが、この春の卒業生が何人かで「病棟へ行ってからも、またいろいろお世話になります」と挨拶に来てくれた時には、何だか報われた気がした。

看護職という大変素晴らしい、けれども大